

8月は、日本の「敗戦月」として、平和について祈り、考えさせられた。しかし、世界の現実には、イラク、シリア、ウクライナ、パレスチナ、イスラエルと戦火は拡大の一途を辿っている。人間は戦うことを止めないのであろうかと暗然とした思いに駆られる。戦火に巻き込まれた人々の恐怖と飢餓の苦悩、そして、殺された人々の無念さと家族の痛みはどれほどであろうか。

米国は、ベトナム戦争において、5万人の戦死者を出して敗北した。ソ連はアフガニスタンに侵攻したが、山岳ゲリラによって、敗退した。大国の最新鋭の武器をもってしても、敗北した事実は重く、武力による他国の占領、支配は不可能であることを示している。

21世紀に入り、人々は平和を望んだが、9・11の「同時多発テロ」が起こった。激怒した米国はテロ撲滅の名の下で、アフガニスタン攻撃を始めた。続いて、大量化学兵器保持を疑い、国連の支持も受けずに、イラク攻撃に走ったが、イラクに敗北した。米国は「名誉ある撤退」などと言っているが、アフガニスタンからも敗退せざるを得なくなった。意味を持たない戦争であったからである。敵味方が判別できない不安に駆られた米兵の横暴、一般市民への誤爆、無機質な無人飛行機爆撃などによって、アフガニスタン、イラクでは、十数万人と言われる無辜の人々が殺された。米軍は信頼を失い、戦いを続けることができなくなった。残ったのは、更なる混乱でしかなかった。

米国は、戦争をすることによって、経済が成り立つ社会構造になっているという。確かに、第二次大戦後、米国は世界中で大小の戦争をし続けている。

9・11の首謀者とされるウサーマ・ビン・ラディンの殺害は法の正義に反する。丸腰の彼を射殺し、それをホワイトハウスに実況中継し、高官たちは喜び合ったという。捕えて、国際法廷で罪状を明らかにし、処罰することが法治国家のすることである。彼の殺害を「ジェロニモ作戦」と言ったが、米国は無法な先住民討伐の時点から一歩も出ていない。

今また「人道的支援」と言って、イラク空爆を再開している。「人道的」と言うのなら、パレスチナの惨状に対し、イスラエルに歯止めをかけることが優先されるべきではないか。厚顔なダブルスタンダードにはあきれ果ててしまう。

安倍政権は「集団的自衛権行使容認」を閣議決定した。「集団」とは何か。米国との連携による集団としか考えられない。イラク戦争の時「ショウザフラッグ（日章旗を見せろ）」、アフガニスタン戦争の時は「ブーツオンザグランド（軍靴を履け）」と言われた。米国の戦争に巻き込まれ、若い自衛隊員の命が失われる。靖国神社に祀ろうというのであろうか。自衛隊員の命が失われるだけではない。戦後69年間、戦争をしない平和の国として、高い評価を得てきたが、米国と同じくテロの標的にされ、国民の命も危うくなっていく。

新しい「イスラム国」の台頭に注目したい。世界中から、兵士が集まっているという。世界の現状に怒りを持つニヒリストたちが集まっているのではないか。怒りを治める手立てを模索しないと、戦火は更に広がるだろう。私たちが今できることは、米国に追従する集団的自衛権に「ノー」を言うことである。平和が破れているところで、槍を鎌に、剣を鋤に変え、戦いを学ばないと叫んだ預言者イザヤの言葉を思う。